



奈良文化財研究所創立 50 周年記念 公開シンポジウム

『古代建築研究の新たな展開』

奈良文化財研究所が1952年に創設されて以来、一貫して研究を積み重ねてきたテーマに、古代建築の研究があります。建造物研究室を中心として、考古学、歴史学、保存科学、文化財修理などの各分野との連携を密にとりながら、古代建築についての総合的な研究に取り組んできました。ここしばらくは、古代建築の解体修理が一段落したこともあり、古代建築研究は停滞気味であると考えられるようになっていましたが、近年、阪神淡路大震災を契機とする構造力学的解析の重視、年輪年代学による木材伐採年の特定などの科学的手法の導入、史跡における古代建築の復原事業にともなう仕様・施工レベルに踏み込んだ検討などの展開により、古代建築が新たな像を結びつつあります。本シンポジウムは研究所創立50周年を記念し、近年の古代建築研究をめぐる動向を集約して今後の研究の進むべき道を考える目的で開催されました。



シンポジウム総合討議の様子

秋深まる2002年11月9日、奈良県新公会堂において、奈良県内に留まらず全国各地から約220名の方々にご参加いただきました。

シンポジウムでは、次の7名による報告がおこなわれました。

古代建築研究の新たな展開 清水真一（奈文研）

古代建築の力学的性状と構造診断 今西良男（奈良県教育委員会）

出土瓦による屋根景観の復原 上原真人（京都大学）

年輪年代学からみた新たな課題 光谷拓実（奈文研）

復原設計から読む古代建築 清水重敦（奈文研）

発掘現場からの問いかけ 長尾 充（奈文研）

近年の古代建築修理から 松田敏行（元奈良県教育委員会）

古代建築の研究は、儀式などによって建築の用途・機能を考えていく研究など、この他にも成果があがりつつあり、本シンポジウムの報告はもとよりすべてを網羅するものではありませんが、ものに即した研究の面で際だった成果がみられる領域を一覧することで、古代建築研究に新たなスタートラインを与えることができたと自負しております。また、会場から構造診断の問題、年輪年代学による成果、復原事業の方法などについて、予想を上回る多くの質問、感想が出され、このテーマに寄せられる期待の大きさが強く感じられました。

古代建築の魅力は、それが常に我々の想像力をかき立て、新たな研究の開拓へと向かわせてくれるところにあるといえるでしょう。しかしながら、研究所も創立50周年を迎え、古代建築を研究することの意義をあらためて問い直すべき時期にきています。現時点での研究の展開を整理した本シンポジウムは、現代に生きる我々と、古代建築ないし古代という時代との間の関係を新たに結び結ぶための第一歩にほかなりません。（文化遺産研究部 清水重敦）

発掘調査の概要

興福寺一乗院の調査（平城第350次）

今、奈良地方裁判所があるところには、興福寺の代表的な子院である一乗院がありました。970年頃の創建で、平重衡による焼打ちをはじめ幾度も火災にあっていますが、そのたびに復興をとげ、大乘院とならぶ藤原家の門跡寺院として長く栄華を誇ってきました。そして江戸時代初期には後陽成天皇の尊覚法親王を迎えています。その直後、寛永の大火災でまた打撃を受けましたが、慶安年間に建て直された宸殿（皇族を迎えるまでは寢殿）は、今では唐招提寺御影堂として知られる格式のある建物です。

今次は、現裁判所庁舎本体の建て替えにともなうて、2000年の建物南側の第317・321次調査、そして2001年の北側庭園部分の第328・330次調査に引き続いて実施したものです。1963年の寢殿建物の発掘調査成果とあわせることにより遺跡の全体像が明らかになることが期待されました。調査期間は2002年10月2日から12月27日、調査面積は900㎡です。はじめに旧庁舎基礎部分の外側に設けた細長い調査区から発掘を進めましたが、途中で庁舎基礎範囲にも遺構が残っていることが明らかになったため、計画を変更して庁舎基礎部分についても調査を実施しました。これらの概要につきましては12月18日に記者発表という形で公開したところです。

調査によって、当地には一乗院創建以前に始まり、1000年以上の時の流れが、溝、井戸、瓦廃棄土坑



調査区全景—裁判所庁舎の基礎を縫うようにして発掘調査が進められた。

など数多くの遺構に刻まれていることが明らかになりました。その中で注目される点は以下の2点と思われます。

第1は、出土した瓦や土器の多くが室町時代末～江戸時代初期に集中し、それらを出土した遺構が全域に認められることから、寛永に消失した一乗院がいかに壮大であったか、そしてそれに続く慶安の復興も大々的に行われたことがわかりました。

第2は、北側の池に関する問題です。まず、2000年に検出した^{やりみず}鑿水遺構が途中で途切れて、池に導水する機能を果たしていないことがわかりました。いっぽう、これまでに調査されたことのなかった庁舎中庭部分のひょうたん池が、近現代の作りかえによるもので、その護岸部分の下から江戸時代の絵図に見える「泉水」が姿を現しました。このことにより、この泉水が池への水の供給源になっていた可能性が出てきたのです。それは、結果的に東と南に長く設定された調査区のいずれの地点でも導水のための施設が検出されなかったことと符合します。寢殿造建物にともなう池の構造を理解する上で重要なデータが得られたといえましょう。

出土した遺物には、土器、^{がせん}瓦磚、金属製品、木製品、漆器など多種多様なものがあります。土器には井戸や整地層、土坑から出土した土師器がもっとも多く、かごを吊った天秤棒を担いだ人や、変わった形相が墨書された皿など、興味深いものがあります。木製品では、室町時代の井戸から出土した「春日大明神」という文字のある木簡、金属製品では北宋銭が注目されます。瓦では「牡丹文」と呼ばれる一乗院仕様のものがとくに多いのですが、興福寺創建以後の各時代の瓦が出土しています。

（平城宮跡発掘調査部 高橋克壽）



ひょうたん池の下から姿を現した「泉水」

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第122次）

石神遺跡は7世紀代の遺構が重層的にみつかったり遺跡で、特に斉明朝（655～661）の建物群は飛鳥の迎賓館と考えられています。今回の調査は建物群の北限を区切る溝と塀のさらに北側の状況を解明することが目的で、2002年7月からおこなっています。

調査区の下層、斉明朝以前はほぼ全面が沼のような低湿地で、ここが施設の外であることを示しています。天武朝（672～686）のころには一部を整地して、調査区中央は池状、あるいは幅の広い溝になっています。藤原宮（694～710）のころには調査区東側に道路と幅4m、深さ1mの大きな素掘りの南北溝が通り、中央には石敷と井戸がつくられました。

遺構の数は少ないのですが、土器、木器、木簡など多量の遺物には目をみはるものがあります。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 富永里菜）

石神遺跡の木簡

石神遺跡から多くの木簡が出土しましたが、

（表）乙丑年十二月三野国ム下評

（裏）大山五十戸造ム下ア □人田ア児安

と書かれた木簡には驚きました。乙丑年は天智4年（665）にあたります。近江遷都以前の古い木簡です。「ム」「ア」は「牟」「部」の略字。「ツ」も片仮名ではなく、「津」などの略字であると考えられています。評（コホリ）は後の郡、「五十戸」（サト）は後の里のこと。「国－郡－里」という律令時代の地方行政組織の前身が、すでに665年段階で整っていたことを示した木簡です。



土器の下の木簡を検出中
木簡で直ちに「改新詔」の信憑性が増すわけではありませんが、再検討は必要となってくるでしょう。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹）

藤原宮南面大垣の調査（飛鳥藤原第124次）

2002年10月下旬から12月末まで、高所寺池という溜池の堤防改修工事ともなう調査をおこないました。池の西側を1100㎡にわたって発掘しました。

調査に入ってもまもなく、六条大路北側溝が見つかり、その後、藤原宮の南面大垣と外濠も確認できました。いずれもほぼ想定通りの位置での発見です。藤原宮の大垣は掘立柱を土壁でつなぎ、瓦葺きの屋根をのせた構造です。外濠からは大垣に葺かれていたと考えられる瓦が出土しました。

さらに内濠と大垣の間でも掘立柱建物を発見しました。内濠に隣接している柱穴が内濠を壊さないように配慮して掘られていることから、この建物は内濠と併存していた可能性が高いと考えます。

一方、外濠と六条大路の間は空地と推定されています。今回の調査でも藤原宮と共存するような遺構は確認できませんでした。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 小谷徳彦）



遺構全景（北から）

中国・遼寧省における遺跡の調査と研究についての講演会

2002年10月26日に、中国・遼寧省における遺跡の調査と研究について講演会を開催しました。演者と演題は、遼寧省文物考古研究所副所長・方殿春氏「査海文化における社会・経済形態—中国北方における農業の起源—」、同研究員の梁振晶氏「2000～

2001年度における石碑地遺跡の保存と復元」、同研究員の孫立学氏「恵寧寺について」です。当日は、研究所外からも多くの参加者を得ました。普段は目にする機会の少ない中国東北地方における遺跡の調査研究をスライドで見ることができ、充実した講演会となりました。

この講演会は、遼寧省文物考古研究所と奈良文化財研究所が「日中古代墳墓副葬品の比較研究」というテーマで進めている共同研究の一環です。毎年、3～5人程度の研究員がお互いの研究所を訪問し、実際に両国の遺跡を訪れ、遺物を手に取る機会を得ています。講演会は今回が初めての企画でしたが、今後も相互の研究を理解し、公開する場を設けていきたいと考えています。

(平城宮跡発掘調査部 豊島直博)



梁振晶氏による講演

関野 貞の関係資料

奈良文化財研究所は、明治時代の建築史学者である関野貞（1868～1935）の関係資料を所蔵しています。関野貞は奈良県の技師として奈良県の古社寺などを精力的に調査し、現在の奈良の古代建築史学・文化財保護行政の基礎を作った研究者です。また、彼は平城宮・平城京研究の第一人者としても有名で、平城宮第二次大極殿・朝堂院の遺構を発見し、平城宮・京について近代歴史学の立場からはじめて本格的に検討しています。彼の平城宮研究は、学位論文「平城京及大内裏考」にまとめられており、この論文こそが、現在の平城宮・京研究の直接の基礎となっていると言っても過言ではありません。

奈文研所蔵の関野貞関係資料は、彼の日記・原稿などです。これらはご子息の関野克氏が所蔵してきましたが、当研究所が奈良の文化財にたずさわっている縁により、2000年1月に氏より寄贈を受けたものです。

現在その関野 貞関係資料を、文化遺産研究部の歴史研究室が中心となって整理しています。整理してみると、彼が作成した野帳・図面類などに興味深い資料が多くありました。それらは、明治時代における奈良所在の文化財の現状を記録したもので、現在では失われてしまった情報も含まれており、たいへん貴重なものです。

例えば平城宮の現況図は、まだ史跡指定される前の平城宮跡を詳しく記録しています。当時の状況を知る上でも、また、彼の学説形成を知る上でも、またとない資料といえます。

現在、整理作業はまだ緒についたばかりです。今後ここからどんなことが分かるのか、楽しみにしながら少しずつ作業を進めています。

(文化遺産研究部 吉川 聡)



額安寺の明治時代現況図調査風景

研究室紹介

飛鳥資料館・学芸室

飛鳥資料館は、1970年12月「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」の閣議決定がなされ、それに基づいて明日香村に設置されることになりました。1973年に当時の春日野庁舎に庶務室と学芸室が発足し、開館の準備に向けて動きはじめ、閣議決定から5年後の1975年に開館の運びとなりました。開館当時の常設展示は、第1展示室のみで「宮殿、寺院、古墳、石造物、万葉集」のコーナー、高松塚古墳の出土遺物を展示した特別コーナーを設けていました。その後、1981年から発掘調査で掘り出された山田寺東回廊の一部を倒壊以前の形で再現展示するための第2展示室の新設が検討されました。1993年から翌年の6月にかけて増改築工事がおこなわれ、後の1996年になって第2展示室に山田寺東回廊が再現され、現在に至っています。

飛鳥資料館では、年に2回、春と秋に定期的な特別展示、不定期に開かれる企画展示を通じて、日ごろの調査研究の成果を公開しています。2002年度は、春の特別展示として、飛鳥地域の飛鳥時代以前の出土物を展示した「あすか以前」を、夏期には企画展示として含水居蔵鏡の代表的なものを展示した「鏡の歴史－含水居蔵鏡の世界－」を、秋の特別展示としては国宝・重要文化財の修理時に作成される保存図を中心とした「A0の記憶－文化財建造物保存図－」をそれぞれ開催しました。学芸室では、このような展示会の企画立案から展示物の借用および展示方法の検討ならびに図録の編集・執筆をおこなうとともに、飛鳥資料館を訪れた方への展示解説や、質問への対応、所蔵品の貸し出し業務などを主におこなっています。

また、これまでおこなってきた特別展示の図録をはじめとして、日本語、英語、韓国語の3カ国語による飛鳥史ガイドブック『飛鳥資料館案内』を発行するほか、ハイビジョン映像による解説番組「遙かなる飛鳥の時代」「山田寺東回廊」「飛鳥の石造物」「飛鳥の古墳」「飛鳥の宮」をDVDとして、英語、中国語、韓国語の解説付で製作、販売などの普及活動もおこなっています。（飛鳥資料館 西山和宏）

飛鳥・藤原京展

奈文研50周年を記念して開催している「飛鳥・藤原京展」も、先日東北歴史博物館での会期を終え、現在は最後の会場となる三重県の四日市市立博物館での展示が始まっています（2003年3月9日まで）。

東北歴史博物館では、1万3千人を超える観客が訪れました。飛鳥・藤原地域から遠く離れた東北でも、関心の高さを知ることができました。斉明天皇は、服属を確認させるために、盛んに蝦夷の賓客を招いて饗宴をしていました。その饗宴の場からは、石人像や彼らが持ち込んだ土器が見つかっており、東北での展示の目玉として話題を集めました。

現在開催中の四日市市立博物館では、「飛鳥・藤原京展」の関連行事として、館独自で制作した「キトラ古墳と冬の星座」というプラネタリウム番組を投影しています。星空を見上げながら飛鳥・藤原時代に想いを馳せる…。一人でも多くの方にこのロマンを感じていただきたいと思っています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 前岡孝彰）

河合隼雄文化庁長官が奈文研を視察

平城宮跡解説ボランティアと懇談

2002年10月24日、河合長官は解説ボランティア50余名と懇談をされました。出席者から、復原建物を始め120haの広大な公開活用と来訪者へ最適な環境を提供するためには、自らの知識の向上とともに資料館展示物の更新、わかりやすい案内板の設置、ゴミ等を投棄させない工夫、また、京奈和道路、近鉄電車の問題や博物館相当施設への充実が必要と提案がありました。

河合長官から、次のお話がありました。平城宮跡解説ボランティア事業は、文化庁「ボランティア通信第1号」でも高く評価し活動を紹介していますが、解説ボランティアの必要性と在り方については、何事も活動を通し、皆様の思いを満たすことが大切で、国、自治体、地域の理解と共通認識があったうえで、ボランティアと行政が、連携協力しその度合いを高めていくことも必要と説明がありました。さらに、活動を通した文化の振興のためには、今後も皆様の責任の範囲で協力と活動をお願いしたいが、これまで以上の満足感を得るためには、皆様が現在の知識で解説するだけでなく、お金を払ってでも積極的な学習を展開し活動に参加して欲しいとの激励がありました。（管理部文化財情報課 大山達夫）



ボランティアとの懇談風景

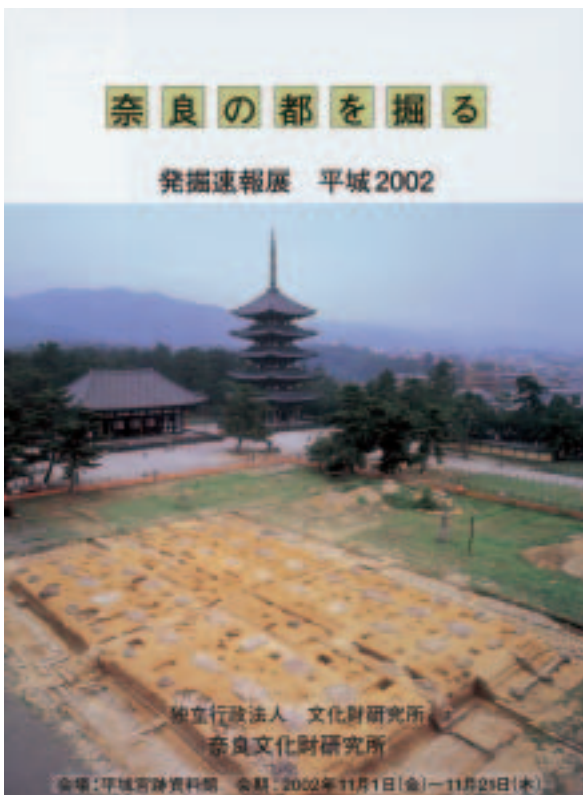
✿ 発掘速報展（平城宮跡資料館）

「奈良の都を掘る－発掘速報展 平城2002－」

2002年11月1日から21日まで、平城宮跡資料館で、上記の速報展を開催しました。2001年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査の成果をまとめて紹介したものです。現地説明会の機会のなかった現場も多く、今回も好評のうちに終えることができました。展示からいくつか紹介します。

平城宮では、まず第一次大極殿院西楼（第337次）の調査では、赤色の彩色（ベンガラ）を残す「埋め木」が目をひきました。赤い柱は奈良の都を象徴するものともなっていますが、平城宮跡内で実際に赤塗りの柱材の実物が出土したのは意外にも今回が最初です。「小便禁止」看板などの木簡にも熱い目がそそがれました。木簡の現物展示は保存上、多くの困難をとまいます。今回も照度計を設置するなど、展示環境のデータの蓄積につとめました。平城宮では、ほかに、第二次朝集殿院南門（第326次）の位置を確認し、規模、造営工事の過程が判明したことを紹介しています。

平城京内では、宅地と寺院の調査が主になりました。長屋王邸の中枢部の調査（第329次）では、懸案であった建物規模を確定しました。寺院では、興



「奈良の都を掘る」リーフレット表紙

福寺関係の調査が主で興福寺中金堂では、創建時以来の度重なる火災と復興の様子を展示しました。一乗院（第330次）と大乘院（第336次）ではともに、園池の変遷をたどりました。明治以降、一乗院は裁判所に、大乘院は一時小学校の敷地になっています。今回は、こうした近代史に関わる出土遺物も展示しました。ノート代わりに使われた石盤^{せきばん}の前では、昔話に花を咲かせる姿がみられました。

（文化財情報発信専門官 千田剛道）

✿ 公開講演会

奈良文化財研究所 第91回公開講演会

毎年、春と秋の2回にわけておこなわれる恒例の公開講演会が、2002年11月16日、平城宮跡資料館講堂にて開催されました。通例、奈文研に所属する研究員が交代で2名ずつ講演するのですが、今回は初めての試みとして、2名の研究員のほか、町田章所長が講演をおこないました。

講演はまず、町田所長が「考古学用語のあれこれ」と題して、考古学で通常もちいられる各用語の実際について講演しました。「音読みと訓読み」「古い言葉」「言葉の意味と異なる用例」という設問について、用語のいわれや伝承の仕方、ニュアンスの違いなどを経験談や事例を交えてわかりやすく説明され、好評を博しました。

つづいて、平城宮跡発掘調査部の金田明大が「歴史空間を地理情報で視く」と題して、GIS（地理情報システム）と考古学分野での利用について講演しました。最近、脚光を浴びつつあるGISの原理を紹介するとともに、考古学への様々な利用について、実際に試みた成果を画面で表示しつつ、考え方や方法などを解説しました。

最後に、平城宮跡発掘調査部の平澤麻衣子が「巨大建造物は足元が肝心－平城宮第一次大極殿の基壇－」と題して、巨大建造物を下から支える基壇について、現在復原工事が進行中の第一次大極殿を題材に講演しました。基壇の外装や作り方について簡単にふれた後、第一次大極殿の基壇形態について、模型や実際の工事写真などを交えつつ、発掘遺構から基壇形態を復原する考察過程を説明しました。

今回、所長が講演したこともあり、会場が満員になるほどの盛況ぶりでした。

（平城宮跡発掘調査部 平澤麻衣子）



公開講演会ポスター

研究会

「日本遺跡学会」の設立をめざした事前活動

各地でおこなう遺跡の保存と活用には、遺跡の持つ学術的な情報をより効果的にわかりやすく伝えるために斬新かつさまざまな工夫がなされ、また、町おこしや町づくりのために遺跡を有効に活用することも検討されています。そして、遺跡の重要性が問われる一方で、遺跡の在り方、現代社会における遺跡の位置づけ等に関する研究がますます重要になってきています。こうした状況の中で、奈良文化財研究所は学会設立に協力するため、「遺跡学をめざした、遺跡の保存と活用に関する研究集会」を開催してきました。

第1回の研究集会は、2000年11月に開催し、坪井清足元奈良国立文化財研究所長の「遺跡学事始め」と題する基調講演をお願いしました。講演ではわが国における初期の遺跡整備とその哲学について、エピソードをまじえながらご紹介いただきました。続いて、全国の埋蔵文化財担当者から直接、遺跡の保存と活用の事例をご紹介いただきました。第2回目の集会でも同じように全国の事例紹介をお願いしました。第3回では「フランス等海外における文化財保護法」、「世界文化遺産登録の事情」と題する特別講演に次いで、「設立趣意文」や「学会規約」の案文を参加者全員で検討しました。そして、2003年2

月1日、「日本遺跡学会」が設立される運びとなりました。

設立趣意文（仮）の結びには、『現代社会の中で遺跡とは何か、遺跡をどのように保存・活用するかを、学際的、国際的なレベルで研究し、ひいては遺跡の本質と、現代あるいは将来におけるあるべき姿を体系化していく必要があります。そのため、遺跡をとおしてさまざまな分野の人たちが情報交換、研究、交流する場として「日本遺跡学会」を設立する。』と述べました。（埋蔵文化財センター長 澤田正昭）



マイクで説明する坪井清足 元奈文研所長

木簡学会第24回研究集会

今年も恒例の木簡学会総会・研究集会が、2002年12月7日・8日の両日にわたって、平城宮跡資料館講堂で開かれました。

7日は総会の後、研究集会を行い、田良島哲氏（文化庁美術学芸課）に「中世の木札文書」という研究報告をいただきました。田良島氏の報告は実態のよくわからなかった中世の木簡使用のあり方について文献史料から検討を加え、これまでの研究の空白を埋めるものです。木簡の使用は古代だけでなく中近世を通じて続き、最近出土事例も増えていますので、今後の本格的な議論の展開が期待されます。

8日は渡邊晃宏（奈文研）「2002年全国出土の木簡」で2002年の木簡出土状況を概観した後、『日本書紀』にみえる白錦後苑の比定地ともされる飛鳥京跡苑池遺構の発掘調査の概要について、調査を担当された奈良県立橿原考古学研究所のト部行弘氏から「飛鳥京跡苑池遺構の調査の概要」と題するご報告をいただき、また出土した木簡について解読に当たっている同研究所の鶴見泰寿氏から「飛鳥京跡苑池遺構出土木簡」というご報告をいただきました。木簡の時期は天武朝から八世紀までの長期間にわたり、遺跡の性格も含めて活発な議論が行われました。

木簡学会は現在個人会員327名、団体会員4団体、

海外会員3名から構成されています。木簡そのものを研究対象とする日本で唯一のユニークな学会で、平城宮跡発掘調査部史料調査室に事務局をおいて活動しています。12月の恒例の研究集会の他、毎年各調査機関及び担当者の方々に多大のご協力をいただきながら、前年の木簡出土情報を中心として掲載する会誌『木簡研究』を刊行し（最新刊は2002年11月刊の24号）、全国の木簡出土の最新情報を発信しています。ご協力いただいている関係各機関にこの場を借りてあつくお礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬ情報提供をお願い申し上げます。情報発信の場として木簡学会を是非ご活用いただければと思います。（平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏）



石神遺跡木簡についての説明風景

お知らせ

◎国際会議—新世紀における考古科学—

2003年1月22日・23日 奈良県新公会堂
保存科学部門

フリーア博物館所蔵ガラス、ヒスイ等の分析ほか
遺跡調査法部門 ローマ時代遺跡の探査ほか
環境考古部門 世界における動物考古学研究ほか
古年輪研究部門

ポーランドにおける年輪年代研究ほか

主催：奈良文化財研究所

特別推進研究 [考古科学の総合的研究]

(代表：澤田正昭)

◎展示「大乘院庭園の歴史を掘る」

—10年間の発掘調査の成果から—

2003年1月15日～2月28日 名勝大乘院庭園文化館
内容：発掘調査の写真・説明パネル・出土品など

◎古代官衙・集落研究会

「古代の陶硯をめぐる諸問題

—地方における文書行政をめぐる—」

2003年3月13日・14日 平城宮跡資料館講堂
吉田恵二 「陶硯研究の現状と課題」

西口壽生 「畿内における陶硯の出現と普及」
神野恵・川越俊一 「平城京出土の陶硯」
生田和宏 「陸奥国における陶硯の様相
—城柵官衙遺跡を中心として—」
小田和利 「地方官衙と陶硯
—大宰府出土例を中心として—」
宮瀧交二 「東国集落と墨書行為」
大川原竜一・山路直充 「古代の墨」
岩宮隆司 「末端文書行政の実態（1）
—文書の作成をめぐる—」
樋口知志 「末端文書行政の実態（2）
—地方における木簡記載をめぐる—」

◆図録等の販売

奈良文化財研究所では、平城宮跡資料館、飛鳥資料館、飛鳥藤原宮跡発掘調査部で図録等を販売しています。

[販売リスト]

刊行物名	定価	飛鳥資料館	平城宮跡資料館	飛鳥藤原宮跡発掘調査部
奈良文化財研究所 紀要2002	1,500	○	○	○
奈良文化財研究所 紀要2001	2,000	○	○	
遺跡を探る	1,000	○	○	
飛鳥のイメージ	900	○		
あすか以前	1,200	○		
含水居蔵鏡図録	1,000	○		
A0の記憶	1,000	○		
キトラ古墳壁画	300	○		○
飛鳥—こころとかたち	1,000	○		
DVD—飛鳥その時代	2,000	○		
平城宮跡資料館図録	1,000		○	
万葉の衣食住	1,000	○		
飛鳥の石造物	1,500	○		

◎販売情報は、奈良文化財研究所HPのほか電話でもお問い合わせできますのでご利用願います。

平城宮跡資料館 TEL0742-30-6756

飛鳥資料館 TEL0744-54-3561 (代)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部 TEL0744-24-1122 (代)

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所

Eメール jimmu@nabunken.go.jp

http://www.nabunken.jp

